

山村の助け合い精神を眼の当たりにしました

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

今回はちょっと柔らかい話題です。

昨年 11月16日、全国山村振興連盟の通常総会をグランドアーク半蔵門で終了して、事務所のある全国町村会館の方に戻ろうとしていた時のことです。竹崎一成会長代行、秘書の西山さんと私の3人で事務所に帰ろうとして、たまたまタクシーが通りがかったので呼び止めました。タクシーに乗ったところ、中年の男性運転手が「今日がタクシーの運転、初めての日なんですよ」と言うので、私は「おめでとうございます」などと言いながら、道案内をしました。

そういった会話をしながら全国町村会館の方に向かっていたところ、国立演芸場の前で、車が道路の脇の縁石に乗り上げてしまいました。ところがこれがとても悪い乗り上げ方で、左の前輪が縁石の向こう側にはまり、動かなくなってしまったのです。私たちは運転手と一緒に車の外に出て車輪を見ました。車輪を回転してもタイヤが浮いて空回りしているような状態なので、私は「これはダメだな。レッカー移動だろうな。タクシー運転初日だというのに、気の毒なことだな」と思いました。

ところが竹崎代行は、車を持ち上げようと言われるのです。運転手を車の運転席に座らせて、西山さんとともに位置に着こうとし始めました。私も一緒にやろうとして、「この重そうな車が持ち上がるだろうか。それにしても非力な自分は、腰を痛めそうだな」と思いました。

ちょうどそのとき、金子会長から私に電話がかかってきました。それで私は車から離れたのですが、電話で話しながら見ていると、なんと車の前半分がみるみる持ち上がって行ったのです。竹崎代行と西山さんが2人だけで、軽々と持ち上げていました。2人とも空手有段者の武闘派なので、身体の鍛え方が違うのでしょうか。車の前輪2つが空中に持ち上がったので、私は驚愕しました。

私があるとき感じたのは、山村での助け合い精神ということでした。都会の人たちは（私もそうですが）、身体を痛めるおそれのあるタクシー車体を持ち上げるほどのことはしないで、レッカー移動など専門家に任せることなのでしょう。しかしそれでは、この運転手は困ったことになっていたと思います。

山村では人手が少ないというだけでなく、自然の脅威に取り囲まれて生活しているので、困った人がいれば手助けするというのが当たり前になっているということではないかと、私は思いました。

幸いタクシーの車体は無傷でしたので、運転手は何事もなかったかのように仕事を続けることができたことなのでしょう。私たち3人は、そこでタクシーを乗り捨てて、あとは歩いて事務所に向かいました。私にとっては、山村の助け合い精神を眼の当たりにさせていただいた貴重な経験となりました。